羣書類從

二百七十八

内閣文庫
和
六八
函
二
架

内閣文庫
番號 和 18690
冊數 666(352)
函號 215 3

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

群書類從卷第二百七十八

和歌部百三十二家集五十一

伊勢大輔集

一橋家書

浅草文庫

検校保己一集

おもかげのかすみのそこにうつるかな　ゆきこそ春の水

正月一日

あしたのはるのはつかぜ　ゆきのしたにもえいでぬるかな

同七日子日よゆきさはあれ

人こそはまつのふるえをたずねけれ　若葉ぞ宮ゆ　つもりぬる

かゝるほとに女のもとよりまうてきたるにおほせら
されたるのかたはらに見えし梅の花なんあまたの人のいふを見て
雲林院のはなさかりをみやこのまつりにをりて今
おこせたりし御

あるとしやまひのいたはりありて君をまつ
上東門院の中宮と申しける時内におはしけるに
うち僧都のやへさくらをたてまつりけるにこゝの
へのうち人はまゐらせて業平朝臣のゆかり
まてに入道殿きこしめしてよみ侍りけるの
ぬものをとおもはせたまひける

いにしへのならのみやこの八重桜けふこゝのへに匂ひぬるかな
とよみけるを入道殿きこしめしてよろこひにひたりける
うちめ君達聞つけてよろこひあへり
御院の御返し
九重に匂ふを見れはさくらかりかさねてきたる春かとそ思ふ
月あかき夜院の御まへに花の梢にほひけるを
皇太后宮妍子の女房たちむかしを思ひて殿上人
うちよりまかてきれとはなのこゝろにもあらて
かの御ことのはをいひやまとおほせられけるに
うき雲にかくれもやすく秋の夜の月の影を

[illegible]

うゑ雲よりかくまさくさ社ちかの部
人のこゝろなんうつみゝ侍みつよけりときて
おなし人妻おこせまれす歌をもい
ゆるうよまれしをあしと人のつあ人のつきこつ花ゆと
[illegible]

まさきもち
うき所のつ人のつ歌も紅葉をもとこみのちよ[illegible]
和寺武蔵院より侍みつてくれたりよ遊て
ものなといへとおもをとれりてよひとらも
はりつ見るつあしてあらてのこみよ

[illegible]

ゆ[illegible]ほとのおとをひさはとめてつ
よ梨ひとも
おもしとしと思ふよれをひしておもかる
つ
思を我おもひ[illegible]
三条院の位時院の皇のおり侍時こゝち
よ[illegible]
[illegible]
一条院の上動修寺よりく御堂供養きに
おとをとりてとてしよ

おく山のたうの松をゆくせにとひろ歩くこの
道をまさの中将ゆきあはれとて詠てる
はるかて
おきそふるにはの白雪いろをしるしをはるはけきぬる
ゆきてうへのこゝろのあるゆきをうらみきめる
むらさきのゆきをよこしまこもりをしまし
はゆく雲あひく院乃ぶきをふもとにはなり
あるくまはをしをみて春きこの雲をよきて
おこせてやしし

ふる雪かるるもひの松をまえあつうきて
ら
いみ方ちきもうれ雪のあおそ雪をおもへ
松と雪のこゝろ見せるをよつきをなへ
おく山の松をふゆる雪をもいと枝身よとあるを枝をけるき
雪
きこえぬ家のいとちよりあきをけることゝ松の雪
あるこのいるのこゝろをよきて流のかとりよ家
ちこれなん我をもとこゝろ後とありしよきつく
流ちきこゝのいるをの雪の戸いをそをやるん

雪中竹

えてたてこ雪降つあいなよ竹のきよ竹うつ乃
一条院うせらはくのちなみしに君をおもて
いこうつるまこらはひけることなと人のこころよ
おもひやるあこれおもくのゆはちこせのこきこふさうなむ
輔親 いせふさこあこうる寺のひるむしうをまうこと
そうのこしひよおおせてうふうこんとやうし
ひこのなるたよ乃ろをきこふやうせのこや吹しこそみん
らこうこあるこ人のはこきこのあほこよ石山
てこうるこてれこをあるよ

みこ社あこれ滝よかうこあ吹たこかよへこきのこうこ風
なの月ナこるおすしてこうかこふはこうる風こうる人せこ
こあひこうり
かけりしてをふゆうる雲れこもこきこり毎ここうる遠坂の実
世中はいうきこうる紅こうおこせあよ
秋夫影よれなひのこあこふはこんはこうる明の月こ西を
人のこうよおるこ人よこうこうりて
うここうかよおりこうよこひこきこふおいここ品をうきこすき
月あこれ夜右大臣の四こうみよ人こおこうり
しこつこめこおかあ夜

よのはねをあしとはうるあ[illegible]

五月

[illegible]法れて[illegible]

はるさうちかの將[illegible]すをおきてつとをんてとるよおと

[illegible]

人[illegible]れぬ[illegible]ひのたまのを[illegible]

次佛月同人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五月[illegible]明の月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五月

[illegible]の[illegible]君よあ[illegible]

人の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]年の五月[illegible]

今もけあるやうもいやなんとてぬく宿社あり是宿とおもふね

あ合はせこそれ

いつハうきさこのもとうもとそほつん雲をたんてぬしのれ

六月ちとく

みかうこもあるもあるんあるし波ちかこのうきさ一道い

七月七日

たなちこのよるれ夜をきてるるのうんをちこ世すかう

男あるんをちこ海おもひつりけるり

そのんをむりのこほのうのけとせてうの

にきあてこの樂のうきてこせける

おくふ乃この樂をもてけり　水ハたちはきあるハ

これあるすせちはもんちてうし

いりうこの君れかこもしてうかの人のうて

おちつるものこうきこの口まれるすむこもんこしるの

又人て

りるゆこちこいかこふ苦ちとをこつけこうて

まこうんし

山れちのまのこの数つまハるの水ハおこふもり

秋来人よ

櫻しもいろもみくねん人あまたしてひさしき秋と知るに花
かへし
露路の秋のうたにいとしくふるころもよくぬ恋のけしき
こゝろむつひ
秋き清れてくる秋ともあふきての山の端出る月の主
流らしにへてつるらし人のよきこゝし
いろくもおもしみやこいろのまゝまさ衣もゝねを含さて
くるくつる
あき山に色とふかくめくる色しけにい へはるゝかと
ちりしときうていかふつり
うつさいて葛ひらひる山さとなら色なるらあるく人もあはれし

乃し
葛はうら人も知る花山里は賤しき人の住むかたのみにはてつれ
くる原によきころれてみやしらに難波わたる里ものかへて
とし路のきほいとおしたる里に向見し
こゝ枕かの難波にあるこそやみれのおしの一枝にて
くしをおしはめておとせられしそれし
う楽し
油こゝ葉のりなえもてものりきてかゝしほくもあしかつの
しのあ
はらしまつにこてと云家にあまの色かやくまゝ
秋は夢路はならさすまつひとかやくるぬるまつにこつそ
なる

仙伯吉頃よ

かうくんせるもわすれ草はの岩よ流るる秋の私を
ゆめ〳〵よあるゆくさとたあしきなるむしかうの行とも

院の御きくあいはせよ五のらうまて

ぬきこよ拾ふあるようてふ菊の花ものくすれ来くるのを

又

ゆもるまこみはらてうむ業のきくうの後の花しまれ

厨のうこ合よさくう

君う世のほうふみゆるふ仙うの年よくうの自ひは

郭公

きうはうも花ふさと雲れ時鳥ふまとうすきうよの一番

志か

久きすのほまらいせるる志のねやよるゆるきも花ら鳥

院の白川及よおつまは流るる志大原もおすす

こうのなれよ花ほとのねよ作こまふつとめく

おのてふるまりて流せるる

世中ふねきこよるかるるるの心の仕数ゆる本うしの世

人し

花ちつるこのふこれるの系ふ公人の風も吹人を見

仙系よゆゆ納言命ねとれひきうう仙百

むその松にかゝりきこゆる神
とあはれしりて
万世まてもしいまたつらきよしも
うや院の御時うゑあつき月
きよみかた月に忘れなやかよふ万世かけのくもらぬを
真河
せりかはのおなたかきみの松かれは君の千年の枝しける
千鳥
ゆくさきはちよゆたかれとまちゐるや千鳥かのをちこちは道はさかへり
いはけの河

池とのみよそにたえしぬまほたこの玉もゝたえすなり
あひ
ちはやふるその枕もさひしからん人のめつるは道とちとせ
まいきの敷の分侍の御忌あいせよ侍る
万ふく世の松の緑をつかふ道る程なを世をさむるかみつる也
うの花
うのはなのはけかきにゝは忘てし波のおとさへの川のねせきにそある
皇后宮寛子家乃歌合月
てりまさる雲のくみとをわたるかは秋の夜すから照月かけ
うの里

あらしすさまじひのこゑ遠くに鴻雁なのの羽音ゆるがん

山田

秋の夜の山田のいなはつまれぬ光はなくもあるかな

いなひ

伯のえふおひうふ松の枝おとよ君のみとせのうすこのきる

松ありしやの栗三条の四堂はてうしきてて

春ひよりてはりはまへのこゑうぐひす

きりのやれよ

主鄭のつくるつかてふ記るはいろちくはうれ

よりの四堂に殿の四あふきふむをひつく

つるうむちのとをいそはるまりおりの扇の風の涼さ

同高ふはむをもんの四まへよりつてちんされ

うをとおこをせうもしよ

くれをもちもいそやはのうのれ世のつるはうれ

大納言殿四殿しれ四年

君とのをふはのこうのやまりのをれはつるよりはかりて

かりけるくうるおかせるまるし

ふるちくは

夜をつむこをはちなりまるまの道をさへ社長八幡

うち殿のはしの系をうをはよむまをとろく

をまこうのしくたまはせうしよ人の家あり
但孫よ物さたくさんさたそうり
かき孫よやつまてはをと物のふる白ひ人よ志ゝ世社と春
あるきゝ人よりもゝ能敷おかひさうり
あるちと志ゝたのゝこはもらゝや敷ゝ能と風の吟可能敷
志ゝ乃大僧正のゝあふれ十賀殿の世ゝをたまゝ
けゝうゝつゝのゝうゝ人をふまゝ世
万代を行のつゝたゝちゝまゝりはゝ君しゝ志ゝうゝんゝ
ゝゝ
君代のゝうゝ乃ゝくゝなゝ日ゝまゝ八のゝうゝ行ゝつゝ志ゝ道
しき

院の三條乃民部卿の家ゝ和ゝ歌ゝ所ゝよゝふ
り幸あゝてちゝきゝんゝのゝひゝめゝされゝよゝの
ゝ代ゝをゝせゝうゝをゝよゝてゝまゝりゝせゝて
おゝかゝをゝまゝつゝは
年ゝつゝもゝり雪ゝ花ゝはゝうゝぐゝいゝえゝあゝゝ志ゝ
い亀代ゝ小ゝ沢ゝと和ゝ歌ゝまゝうゝら
ゝゝつゝく東宮のゝみゝやゝてゝはゝつゝりゝふ
はゝうゝしゝかゝゝ乃ゝかゝゝゝ代ゝゝまゝいゝせゝる
君ゝまゝちゝもゝて万代の中ゝをゝのゝもゝますゝ紙
ゝ
東宮大夫

[illegible]

かつらのもとにやどりまつ[illegible]

みよしのゝはなのいせのうりし

あるじかくれぬるゆゑ梅の白ひの枝もうりし

久し

民アヤ

梅うえしまうゑ枝も白ひうり哀とあかぬこゝろの

皇后宮の御うりたやへにうゑたまひをく

女房

あまをやみかつらのいとの白ひつるもゝ[illegible]

こゝろせてうやうのこともうるはしまうて

あるこゝろ[illegible]

久し

やへ[illegible]

これをきてはうつ[illegible]

[illegible]

又

[illegible]

なりのぶのをうしきふあさの衣やうて

[illegible]

[illegible]

たまもかるあまとなれやうちもの〻浦はのつゝ
うの人すくてのちわさの経のかを四條中納
言
たかをきこえしふくろ
相樂のたちすはなの紅も乃人よ嶺の光をそうつす
ふか
くて
紅もの〻人よりちをの嶺を結ひ和けみりけ玉の光
おはしてちさうみ
光月の光はいとなをそてん爲こはる雲よりこれのを
いて
月をのをそうれしかりて宮ふあはきをうゆ時編か

同人二月十五日乃宮のいのりかくふ
つ孫ちもをの入日の使ふやけをそうふ〻ひやん
くし
けふいを濃ふ〻れあにこのこれもし入日のををなるめ
同日夜ふをのふ人
いふれををふもの月のをよ中をしもをいをしるん
か爲
夜ふをの月くまにふをふ中はあをれやをうまるふ
又乃ふをき日ふ
日をにをの日けをりはかををきをいをもくをを編をを

[illegible]ものあるをとこたちのうらふまの
人ふうりてゆくを乃人のうりや楽し
物をを社ちのたもとにはさらめおみこ[illegible]の条は社
むすめのうりさしらほひうりうみこ[illegible]
きうちめのおやをしをもてこいふ人のこゑのをかもの縁
くく
人のこれおやふなるてうを秋おやの[illegible]おひ志ろ[illegible]
うれしふる九月許小菊をうゑて面白いめと
宴しふ
おとゝ[illegible]きゆく人ふ秋のきく先紅志もにう色おさつる

[illegible]と云人のこひしくをはひ
けとおこうれて後とのよ物ひ秋しろ
ひやりし
[illegible]さ[illegible]おもひおきは志ろふまやはれぬあを秋の
くく
[illegible]をあとせちの[illegible]志ろ[illegible]のふうく
はをさちふいてうる人のもとにはる人のいひうを
おもみこうもうちれし人や誰の[illegible]ゆまはせ人我も
うゑ
[illegible]けせしやをのすうこ[illegible]山井の[illegible]ねぬ

正月一日こゝろみにとお日ふちとのきぬやうとそ
ゑつ延くらうちらむかしはつの事ハ今世の六月をうちぬ
たゝめしく七日のかの名ハ我人のおたをせてこれハおいさら 魚きハ
人のさかんにつきゐるといへりしふ
秋くあく雪ゐるのかみつみけ遠ハとしくれてる嫁ゐら
月目うまこのそとうら
あらむのとしもかのみえ摘人ハうろゑつきてやのてらん
返し
うれゑつきつまにけ君をたまさらふ君とふ日のかの歳 ふり
姫しみといふとこ繰まておゐらとすらういまま

よむふあしまのいけ
うちわきさのしまの池の水乃いろハあさみをわけてけ波も猛
かさとり山
あきハ霊かさらかの山のこみさハ秋の夜のこれもとこうしらう
姫しるの氏と乃歌
隠さも出澄しひする人ハ孫をいうてかしこの里の夜しそ 翁の年
かくてむと玄人のひさしくおもを我清しく
つけていひやりし
いふやとそいうかと我まついて法しよそそのやハいたそ やむへき
文

かくて夏ごろはなれぬるきぬぎぬのひねりこゆるつゆ

五月六日ばかりに人あるに人ふ

人まつ　まつのうへにあやめ草ふるなるこゑもしくれぬ

あやめ草ふるなるこゑもしくれぬ

ほとゝぎす人まつけきこゑもよはのふるまきねをなん

ほとゝぎすなくこゑ人のこゝろ

人のよも我をもけふはあるかな

とありしを

ものゝあはれなりけれはうるはしき

山里ふかくとこゝろものこゝろひまうてきこゝ和

乃をはれおりきこゝ題にこゝろこゝろみあつあた

ひ　ほとゝぎす　ものこゝろ　ほとゝぎすなくこゑ

海こゝの波ふかもなれかこゝ　ほとゝぎすなくこゑ人社あれ　八月

おもひこゝろ　山里の時雨

ものこゝ人もあれ山こゝろの時雨　時雨

人てきこゝの　ものこゝろ　時雨

ばかりの　ものをいすてこゝ　分なれこゝ　菊こゝ　時雨

九月三日すけこゝの大納のもとに

ものこゝ人今こゝ　とはれこゝ　ものこゝ秋の人言

袁くく言ひあきれをりしほどの物語きこえおいのなごりおもふことあるよし侍りしをみて

おもふこと侍りしをみて

おなじ人の家の紅葉のもとにて

あつまへ侍りしに人のむすめをまかりとりしく

いきけるものとてもとゝまるを君きこゆ袁こゝろ紙

いきけるものとてもとゝまるを君なきをかなしがりて

院の御堂すゝく百わうこゝまれしをみる

ちゝの墓をとらせたまふやとこゝろ

袁てをらひきてをみてなを書うめるに咲かゝるの

院のちゝ侍ふ木りまゝけるに人くきくを

もてあそぶ

なへての花もかるめとおもふのちはきくゝ蟹の名そ

右大臣まゐりたまふみちふはゐよあひて

宿ちくゝのへる時ゐいかよるれやゝ山路ゆりをゝ清やまの

袁ぎんりとて云人のおかをさめゝせ下ゝ

ちやあ袁とゝもひとうるおこすとゝ

ほんゐくの袁ぎぬをぬる君をれゝ侍ふとゝ侍ふたえやる

うゑ

みのうちかほくゆるむ袁うりの袁ぎぬをとよひらまて

僧のとかくものらむひふきまさりて
はしたなのおりなきてつぼをすくすくとそれを
ひろひ
ゑし
あきしをたゝしえすきのしももとのあをてむくん
かまをいふものなきるふつてうれるまの
えさふはけて人
なもうるおとのさはるかをとおもひきれるこにかすん絹
う毒
決つらやうきのえそれをてあをひつくるふんをのりん
あちのきの姫をふくるふ新たけをたゝして

これを題よてあるみてといひる人ア
源大人ふ不毒もつこにふてふちの新をけ四をたて西
えのうをもしてつけすといひて人
根てもるふはきうふ新めんのり乃衣をうけすと六
毒
なかちふ新ふ法の衣りもこ三ねをたんこをやうみぬ
とかはやをふんと知りよくのらうわふ
四めよゆをんてうかあきこのまちきたに衣をふ
ひうろといふあをひこ後の山とのこをといふ人
うすこしうれるくなりてふるきるふハの

里ふくるとてうのしろんてくることのみしよ
芦の葉のうつかへてのうら羅波人あるのやうに成ひやうき
おとをめくるよそのまつ
わとをまてうら蓮くるを蓮のれうくるもうはと
うまとのいうなりしに日
きてきさいの世のこまいのくるとうの面ハ点むいくるかな

二位

校合了

従二位行治部卿平朝臣判

古以織紋正源朝臣校合了

康資王母集　弥仙母集

いまは世の浮時分ハ人をうらんをとこ女ハあるふ
いひはもるゝ宮おのくゝ別れと打間をうらも
れハ　春宮大夫
ゝしふしをいとて打ぬる堤木乃思ふ人ふりぬこひ武
返し
源ゝゝうの世ハ河の堤ハ忘ハ忘ハ忘ハ年ふりぬる
打ぬる人周防ハ内侍もてハ聞くねるこ伝
ふしまえはゝゝ川汐まゝ蓮の行くゝ未葉に成る白浪
返し　同大納言